

朝日遺跡の異形土器について

—鳥形土器を考えるにあたって—

飴 谷 一

1. はじめに

本稿は、朝日遺跡から出土した「異形土器」を中心に、弥生時代の幾つかの遺跡から出土例の報告されている「鳥形土器」について若干の考察を試みるものである。

2. 朝日遺跡の異形土器

この異形土器（図1）は、下半部が欠損しており、全体の形を知ることは困難である。しかし全体に空洞をなしていること、また下半部に連続する部分の残存状況から、下半部へは壺形土器の体部が続いていたと考えられる。以下、残存部を頭部と呼ぶ。

頭部は皮袋状のふくらみを呈し、その一端に注口をもつ。注口部に相対する尾部には空気孔のような小孔が穿たれ、頂部には刻み目をつけた突帯を付している。

法量は、最大長17cm、最大幅8cm、注口径5cm、である。

頭部は、側部を粘土板によって舟形につくった後、別の粘土紐で頂部をふさいで筒状にしている。

注口部、尾部の両付近は磨耗している。器面は刷毛状工具で調整した後、ナデ調整を施している。

この異形土器の頭部は、その形が従来報告されている弥生時代の「鳥形土器」⁽¹⁾、さらには須恵器の「鳥形瓶」⁽²⁾にほぼ類似している。また刷毛調整やナデ調整にも、「鳥形土器」同様に鳥の羽を想わせるかのように施されている部分がある。よってこれが「鳥形」をなすものとみる。

下半部が欠損していること、器形が特殊であることからこの土器の時期を決定することは難しいが、しかし文様構成や共伴遺物からみて弥生時代中期後半の高蔵式期頃に属するものとする。

この異形土器は朝日遺跡61KL区で検出した溝（SD01）から出土した。この溝は、弥生時代中期の朝日遺跡では集落を囲む環濠の外（環濠の南側）に位置している。そしてこの時期には既に溝内に貝層が形成されていたことが調査で確認できた。このことから当時SD01は集落における廃棄物処理の場としての役割を担っていたと見られる。

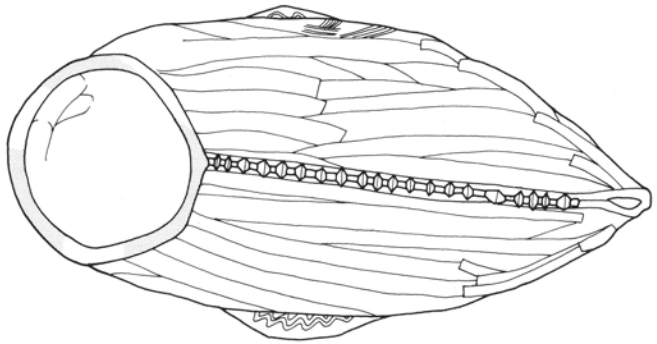
3. 弥生時代の鳥の表現方法

「鳥」のモチーフの多用は弥生時代に始まる。すなわち大陸からの稲作農耕文化の伝播に伴い、鳥は「穀霊を招く」存在⁽³⁾として人々に受け入れられたのである。このことは縄文時代の遺跡からは鳥をイメージした遺物は少ないが、稲作文化が基調となる弥生時代に西日本を中心として、それが多くみられる例からも窺うことができる。

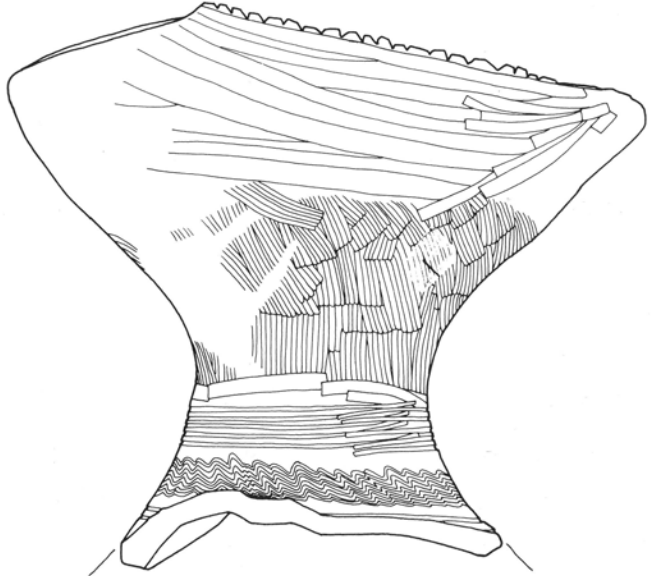
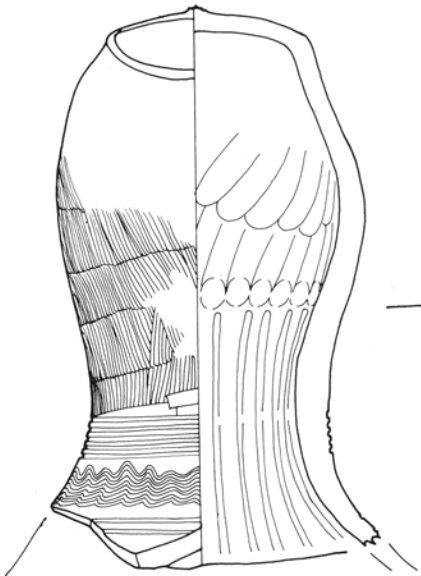
弥生時代の遺跡から出土する鳥を表現した遺物は、鳥形木製品、鳥形土製品、鳥形土器がある。また鳥の線刻画やスタンプ文様を施した土器、銅鐸も加えることができる。



0 異形土器復原図 5cm



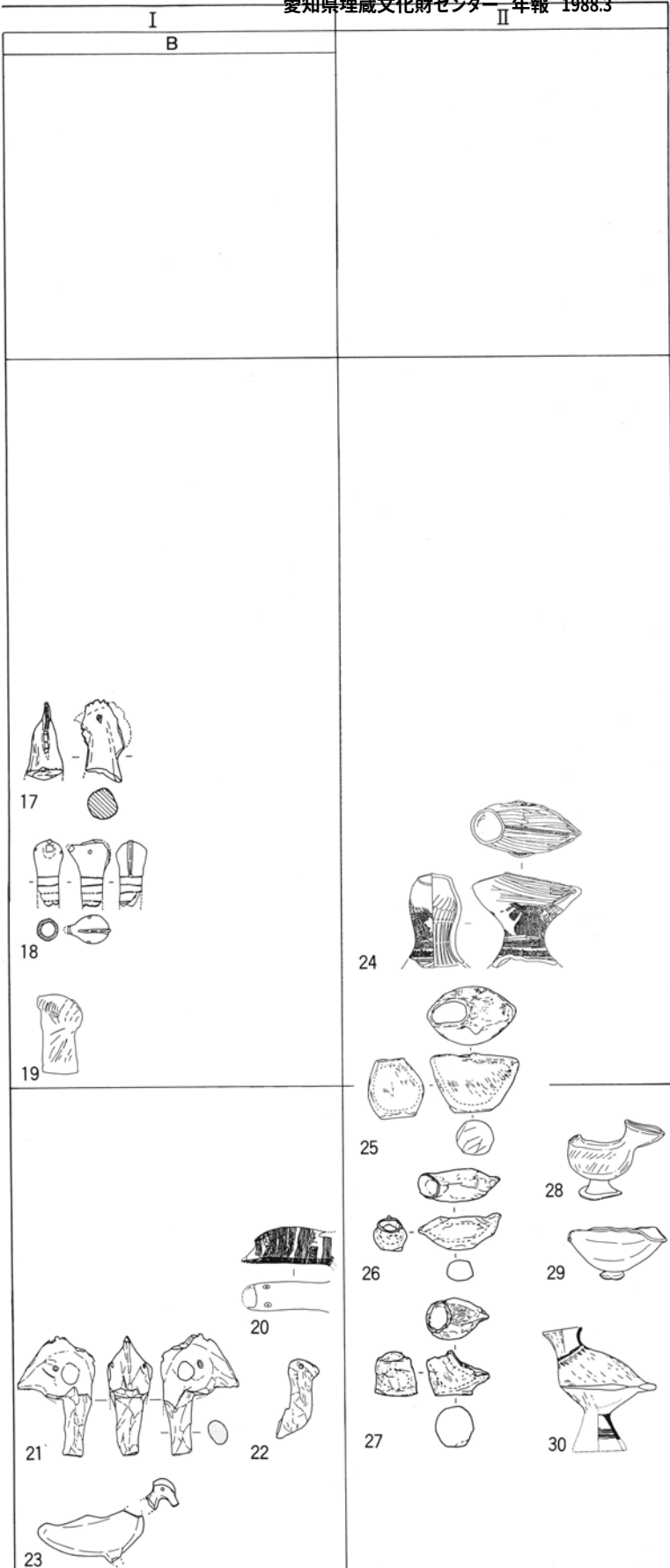
1



第1図 朝日遺跡61KL区出土異形土器

第2図 弥生時代「鳥形製品」分類図(井上義光氏作成の原図をもとに筆者改編)

		A	
		a	b
前 期	1		
	2		
中 期	3		
	4		
期	5		
	6		
後 期	7		
	8		
	9		
	10		
	11		
	12		
	13		
	14		
	15		
	16		



- 遺跡名
- 1 山賀遺跡
 - 2 西川津遺跡
 - 3 ~ 8 池上遺跡
 - 9 詫田西分貝塚
 - 10 巨摩庵寺遺跡
 - 11 亀井北遺跡
 - 12・14 瓜生堂遺跡
 - 13 宮ヶ久保遺跡
 - 15・16・24~27 朝日遺跡
 - 17 中久世遺跡
 - 18 下稗田遺跡
 - 19 吉行遺跡
 - 20 瑞穂遺跡
 - 21 唐古・鍵遺跡
 - 22・28 漆町遺跡
 - 23 雲山鳥打遺跡
 - 29 中村松田遺跡
 - 30 藏平遺跡

ここでは、「鳥」をイメージとして造形されたものを「鳥形製品」とよび、これを「鳥」として完結している鳥形木製品、鳥形土製品をⅠ類（以下両者を合わせて「鳥形模造品」と呼ぶ）、鳥のモチーフを容器に使用した鳥形土器をⅡ類とする。Ⅰ類は木製品と土製品とでは材質が異なっているので、木製品をⅠ－A類、土製品をⅠ－B類に区分する。

なお鳥の線刻画やスタンプ文様は、鳥を器物として表現したものではないので、この分類から除く。

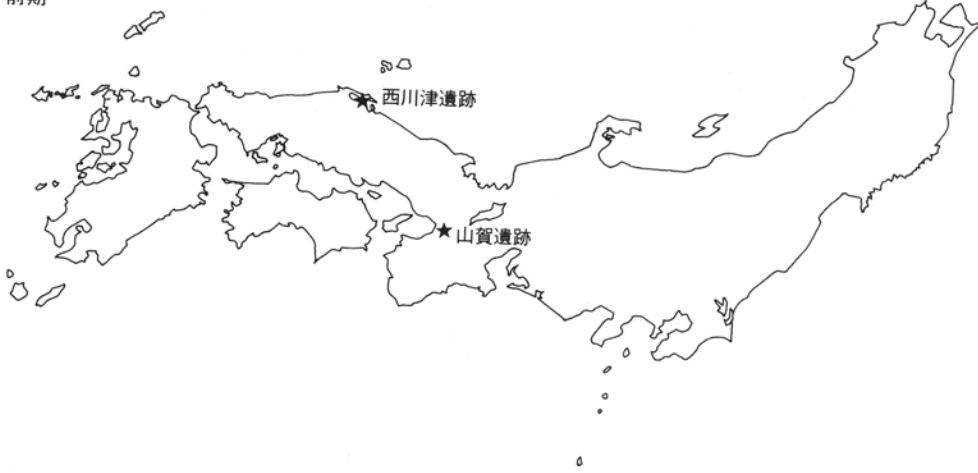
Ⅰ－A類 井上義光氏の分類を援用⁽⁴⁾し、形態の差異から、「鳥の飛翔を表現したもの（池上遺跡出土例⁽⁵⁾）」「鳥の静止態を表現したもの（宮ヶ久保遺跡出土例⁽⁶⁾）」の二種類に細分される。前者をⅠ－A a類、後者をⅠ－A b類とする。

Ⅰ－B類 鶏形土製品（唐古・鍵遺跡出土例⁽⁷⁾）と水鳥形土製品（漆町遺跡出土例⁽⁸⁾）の二種類がある。両種ともに全体の形が判るものが少なく、構造形態にも不明な点が多い。従ってここでは、二種類ある、というだけにとどめておく。



第3図 鳥形木製品、鳥形土製品、鳥形土器、鳥の骨出土地分布図

前期



中期



後期



★ 鳥形木製品 ☆ 鳥形土器 ▲ 鳥形木製品と鳥形土器

第4図 弥生時代鳥形木製品と鳥形土器時期別分布図(時期区分は畿内の区分を用いた)

Ⅱ類 脚部の有無はあるが、いずれも注口をもつ容器である。形態もⅠ—A b類と同じ鳥の静止態を表している。

今回報告した異形土器は、その形態から、「鳥形」の頭部（口縁部）をもった壺形土器、すなわち「鳥形複合壺」と考えられる。これは抽象化した「鳥」を容器の一部に取り入れたものである。よってここでいう「鳥形土器」の範疇に含むことができる。

以上の分類から、弥生時代の「鳥形製品」は、材質や形態の違いにより、使用形態や場所が異なっていたものと推察される。

4. 鳥形土器についての考察

「鳥」の形を写しとった鳥形模造品との関連性をふまえ、弥生時代の鳥形土器について考えていく。

鳥形木製品（Ⅰ—A a類）については、金関恕氏の研究がある⁽⁹⁾。氏はこれを「『魏志東夷伝』馬韓の条に見える蘇塗に関連」させ、「穀霊を招く鳥」としている⁽¹⁰⁾。

鳥形土製品は、今日までの資料が少なかったことから十分な研究がなされていない。ただ鶏形土製品については、「鶏が農耕儀礼のための犠牲禽であった可能性が高い⁽¹¹⁾」ことから、農耕の節目の儀礼の際に「鶏の代役」として用いられたと考えられる。

農耕儀礼⁽¹²⁾の中で「鳥」は人間と「穀霊」との仲介をする重要な位置にあるとされている。鳥形模造品も、（民族例を含めた）民俗事例にみられるように、重要なものであった。さらに「鳥」に注目すれば、鳥をモチーフとした鳥形土器もそれと同等に扱われるものであった可能性が高い。

鳥形模造品が人間と「穀霊」を観念的に媒介する「もの」であるのに対し、鳥形土器は、農耕儀礼の場において人から人へ渡るという行為に伴って、人間と（神聖な液体と化した）「穀霊」とを媒介する「もの」であるといえる⁽¹³⁾。そしてこれらを出土する遺構は、集落を囲む環濠や居住区外の溝、廃棄（特殊）土坑といった生活から除外された場である。従って非日常的行為としての農耕儀礼の後に、そこで使われた鳥形土器は、鳥形模造品と同様、このような場所に投棄されたとみることができる。

最後に弥生時代の鳥形製品の分布状況について少し触れる。

現在まで鳥形木製品、鳥形土製品を出土した遺跡数は、前者が11、後者が8を数える。また鳥形土器の場合は4遺跡から出土している。興味深いのはそれらの多くが伊勢湾地方以西の西日本から出土していることである（鳥形模造品に限ればすべて西日本、図3参照）。この分布の範囲は奇しくも弥生時代前期の「遠賀川式土器」が波及した地域とほぼ重なる。

最近、東日本の弥生時代の遺跡でも水田跡がしばしば発見され、中には前期に遡ると言われているものもある。しかし土器や石器の組成からみて、なお前時代的特徴が色濃く残っているように見受けられる。つまり東日本へは稲作の技術のみが伝播し、西日本の性格を強くもった文化内容は伝播しなかったと考えられる。そのことは稲作農耕儀礼に欠くことのできない「鳥形製品」の分布からも窺われる。(ただ、群馬県御布呂遺跡から出土した鶏の肉塊は、「鳥形製品」に代わる「鳥」が東日本にも存在した可能性を示唆するものかもしれない。しかし、これは後期に下る資料なので、弥生時代の開始に遡ってこの考えをあてはめることは困難である。)

弥生時代の日本列島を概観するとき、西日本と東日本では、明らかに文化内容に差のあることに気がつく。その差異を示す資料は様々であるが、今回とりあげた鳥形土器もそのちがいを知る上で一つの重要な資料を提供したと言える。

今後、弥生時代の「鳥」を考える場合、そのような分布をもたらした要因も併せて考えていかなければならない。資料の増加を期待したい。

5. まとめ

以上の内容を要約すると次のようになる。

1. 鳥形模造品が「鳥」を土や木などにうつしかえたものに対し、鳥形土器は鳥のモチーフを容器に採用したものである。
2. 今回報告した異形土器は、その形態から鳥形土器の範疇に含むことができる。「鳥形複合壺」である。
3. 鳥形模造品は人間と「穀霊」を観念的に媒介する「もの」であるのに対し、鳥形土器は人間の行為に伴い、それらを物理的に媒介する「もの」である。
4. 鳥形土器は、その分布状況から、鳥形模造品同様、弥生時代における西日本の特色の1つである。

本稿を作成するにあたり、母校奈良大学の水野正好、酒井龍一両先生より資料の提供や数多くの有益な御教示をいただいた。記して謝意を表する。

1988. 2. 5

〔注〕

- (1) これまで「鳥形土器」を報告している調査例は、朝日遺跡（加藤安信他「土製品」『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982）、蔵平遺跡（柴田稔「静岡県蔵平遺跡発見の鳥形土器」『考古学雑誌』第66巻第1号 1980）、中村松田遺跡（月刊文化財発掘出土情報10 1987）
- (2) 原口正三 1979 「須恵器」『日本の原始美術』4 講談社
- (3) 金関 恕 1982 「神を招く鳥」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社
- (4) 井上義光 1985 「祭祀研究の一視点 ―鳥形模造品を中心として―」『末永先生米寿記念献呈論文集』明新社
- (5) 勸大阪文化財センター 1978 『池上遺跡』第4分冊の2「木器編」
- (6) 中村徹也 1979 「木製品動物群と土器に装飾された動物文―山口県宮ヶ久保遺跡」『考古学雑誌』第65巻第3号
- (7) 寺沢 薫 1980 「唐古・鍵遺跡第10次・11次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』奈良県立橿原考古学研究所編
- (8) 石川県立埋蔵文化財センター 1982 『漆町遺跡』
- (9) 注③参照
- (10) 金関氏とは別に水野正好氏は、「村境にあった鳥居の上に立てられていた」とみている（水野正好 1982 「弥生時代のまつり―その成立と展開―」『歴史公論』第8巻第9号
- (11) 古代学研究会 1987 「鶏の考古学」〈シンポジウム〉『古代学研究』114号
- (12) 金関 恕氏は鳥取県淀江町稲吉遺跡出土の壺形土器に描かれた線刻画を解釈し、弥生時代の農耕儀礼のあり方を捉えようとした（金関 恕 1985 「考古学から見た古事記歌謡」『天理大学学报』145）
- (13) 水野正好氏の御教示によれば、「古代において鳥形土器は水鳥を形どったものであった。それは祭の宴に使われ、そこに注がれた液体（酒）を飲むことにより体の内面が浄められる、と信じられた。また水鳥が「霊の放鳥」と呼ばれていたことから、祖霊を迎える儀式に用いられた」といわれる。

〔引用文献〕

- 行橋市教育委員会 1983 「下稗田遺跡発掘調査概報Ⅳ」
- 勸大阪文化財センター 1981 『巨摩・瓜生堂』
- 〃 1983 『瓜生堂』
- 〃 1983 『山賀』その2
- 〃 1986 『亀井北』その3
- 瀬川芳則 1983 「稲作農耕の社会と民俗」『稲と鉄』（日本民俗文化大系3）小学館
- 春成秀爾 1987 「銅鐸のまつり」国立歴史民俗資料館研究報告 第12集
- 宮腰健司 1986 「祭りと道具」『埋蔵文化財 愛知』No.7
- 吉田富夫 1937 「尾張国瑞穂発見の動物形土器」『考古学』8・9
- 月刊文化財発掘出土情報 1983 5月号
- 〃 1984 6月号

〔追記〕

「鳥形製品」の分類図に、鳥形土製品（Ⅰ－B類）の追加資料として南東山遺跡（愛知県春日井市）出土例をあげておく。これは「水鳥の特徴をよくとらえている」と報告されている。（宮川芳照「鳥形土器」『南東山遺跡』（春日井市遺跡発掘調査報告第4集）春日井市教育委員会 1970）